



Title	朝鮮語教科書の術語と概念について
Author(s)	岩井, 亮雄
Citation	外国語教育のフロンティア. 2024, 7, p. 175-186
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94993
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

朝鮮語教科書の術語と概念について

한국어 교과서의 학술어와 개념에 대하여

岩井 亮雄

要旨

本稿は、教材研究の一環として、筆者が専攻語科目 1 年実習及び 2 年実習で用いている 2 種類の朝鮮語教科書間の術語と概念の違い、特に発音と文法に関する言語現象の捉え方の違いを考察したものである。

요지

본고는 교재 연구의 일환으로 필자가 전공어과목 1 학년 실습 및 2 학년 실습에서 사용하고 있는 한국어 교과서들에 있어서의 학술어와 개념의 차이, 특히 발음과 문법에 관한 언어 현상을 설명하는 법의 차이를 고찰한 것이다.

キーワード： 朝鮮語、教科書、術語、概念、捉え方の違い

1. はじめに

朝鮮語教科書で用いられる術語と概念は教科書ごとに様々である。その理由の一つは、教科書執筆者の文法観や教育観などが反映されているからである。ある概念に対する捉え方の違いが術語の使用の違いに反映されているということである。こうしたことは朝鮮語等の語学教科書に限らず、あらゆる学問の教科書に言えることだろうと思う。

筆者が担当している専攻語科目 1 年実習と 2 年実習で用いている朝鮮語教科書は、言語現象の捉え方に違うところがいくつかある。今、教科書は教材の一つの要素であると見て、本教材研究では、筆者が専攻語実習で用いている 2 種類の教科書の術語と概念で捉え方の違いがあるものを分析する。特に、2 年実習で用いている教科書の術語と概念が 1 年実習で用いている教科書ではどのように説明されているか、すなわち学生が 1 年実習での学習を前提にして 2 年実習の教科書の記述を理解できるようにするという、実際に筆者が授業で説明しているような視座から分析していく。

以下、2 節で分析方法を述べる。そして、3 節で発音に関する術語と概念、4 節で文法に関する術語と概念、5 節でその他について、分析対象とした教科書間での捉え方の違いを中心に述べる。

2. 分析方法

分析対象とする朝鮮語教科書は、筆者が担当する 2 年実習の教科書『朝鮮語の入門 改訂版』(菅野裕臣 2007) (以下、『入門』と略記する。分析には 2018 年 2 刷を用いた¹⁾)、1 年実習の教科書『ことばの架け橋 改訂版』(生越直樹他 2011) (以下、『架け橋』また

は初級編と略記する。分析には 2020 年改訂 10 刷を用いた²⁾。)、及び『ことばの架け橋 中級表現編』(生越直樹 2009) (以下、『架け橋』または中級編と略記する。分析には 2019 年 3 刷を用いた。)である³⁾。『入門』も『架け橋』も執筆者らの所属大学等で長く用いられている教科書である。以下で明らかにするように、両教科書の術語と概念、言語現象に対する捉え方の違いは少ないが、一方が他方よりも標準的である、優れている／劣っているなどということは前提にしていない。この点は念のため断っておく。

分析対象とする事項は、『入門』と『架け橋』で術語や概念の捉え方に違いがあるもの、特に発音と文法に関するものであり、一方でしか扱っていないような事項は基本的に分析対象外とした⁴⁾。

また、『入門』の術語と概念に対し『架け橋』ではどのような術語と概念を用いているかという視座から記述することを原則とする。これは、先述の通り、『架け橋』をテキストに 1 年実習／朝鮮語初級で学んだ学生が『入門』をテキストに 2 年実習／朝鮮語中級で学ぶ際、学生が 1 年実習／朝鮮語初級を土台にして『架け橋』と『入門』の術語と概念の違いを理解できるようにという、筆者自身の教育実践上の都合によるものである。

3. 発音に関する術語と概念

(1) 文字と発音

子音字と子音に関しては、〈平音〉の捉え方が『入門』と『架け橋』で異なる。『入門』は子音字ㄱ、ㄷ、ㄴ、ㅍ、ㅌの発音を〈平音〉とし (p.19)、子音字ㄴ、ㄷ、ㅌの発音を〈鼻音〉、子音字ㄹの発音を〈流音〉と呼んでいる。『架け橋』は子音字ㄱ、ㄷ、ㄴ、ㅍ、ㅌの発音の他、子音字ㄴ、ㄷ、ㅌの発音も〈平音〉としている (初級編 p.7、10)。つまり、〈激音〉と〈濃音〉以外を〈平音〉と捉えている。実際にはある現象を説明する際に〈平音〉などがどの子音を指しているかが説明されているため、〈平音〉の捉え方の違いが教科書を読む際に支障となることはないだろう。

母音字と母音に関しては、『入門』が母音字 (基本母音字、合成母音字) を基準に、『架け橋』が母音 (単母音、重母音) を基準にして解説しているという違いがある。また、『入門』はㅏ [e]、ㅓ [ɛ] の発音を区別して説明しているのに対し、『架け橋』はㅏ [e]、ㅓ [ɛ] ([e]) のように提示し、「ㅓは実際にはㅏと同じ音で発音されることが多い」(p.4) のように説明している。実際に教科書付属音声を観察すると、『入門』はㅏとㅓの発音が聴覚的にも音響的にもほとんど違いがない (CD20)。『架け橋』は第 1 課 1-3 のㅏとㅓの発音は男声、女声ともに聴覚的にも音響的にも若干の違いが観察され、具体的にはㅏとㅓの F1 (第 1 フォルマント) に差が見出せる (CD2)。同じく第 1 課練習 1 のㅏとㅓの発音には聴覚的にも音響的にもほとんど違いがないが、調音時の開口度 (舌の上下位置) が影響したためかㅓの母音長がㅏのそれよりも少し短く、おそらくこのことが聴覚上の違いに反映されることになる (CD2)。

(2) 変化と規則

発音に関する諸現象の総称に、『入門』は〈発音の変化〉という語を当て、『架け橋』

は〈発音規則〉という語を当てている。発音の「変化」と言おうが「規則」と言おうが、両教科書とも現代朝鮮語の語学教科書であるから基本的には共時的現象に限られる。もちろん、そうした共時的現象の中には歴史的現象を反映したものも含まれる。

(3) 終声の初声化

『入門』の〈終声の初声化〉は『架け橋』の〈連音化〉のことである。この現象は1) 語と助詞の境界や語幹と接尾辞の境界などの後部要素が非自立的要素の場合と、2) 語と語の境界や接頭辞と語の境界などの後部要素が自律的要素の場合で振る舞いが異なる⁹⁾。さらに、꽃이→[꼬시](花が)などに〈終声の初声化〉という術語を当てるのは共時的には適当ではないかもしれないが、このように、3) 語と助詞の境界では、『入門』の言葉を借りると、「体言の終声は話しことばで普通簡略化され」(p.107) することもある。『入門』はこのような環境の違いによる発音の違いを本文で説明している。『架け橋』は先述の1) は説明しているが、2) は該当する場合が出てきたときに「これはこう読む」式の説明はあるものの、その場合の〈連音化〉の機序までは説明を与えていないものと思われる。

また、発音の観察の仕方が両教科書で異なるところがある。

『入門』は「終声字のうち、ㅍ、ㅌ、ㄷ、ㅂ、ㅁは母音字の前で初声化した発音が追加され」(p.44) ると見て、次のような例を与えている。잎은→[입픈](葉は)、밭은→[발튼](畑は)、꽃은→[꼰춘](花は)、부엌은→[부억큰](台所は)、밖은→[박큰](外は)。そして、「話しことばで速く発音されるときには、[ㅍ+ㅁ]、[ㅂ+ㅁ]、[ㄷ+ㅁ]、[ㄷ+ㅂ]、[ㄷ+ㅁ]などの終声は発音されないことがあ」(p.115) ると見ている。つまり、話し言葉での速い発音では先の発音は、잎은→[입픈]→[이픈]、밭은→[발튼]→[바튼]、꽃은→[꼰춘]→[꼬춘]、부엌은→[부억큰]→[부어큰]、밖은→[박큰]→[바큰]のように発音しうると見ているものと考えられる。

これに対し、『架け橋』は『入門』のような表記はとらず、先の発音であれば、잎은→[이픈]、밭은→[바튼]、꽃은→[꼬춘]、부엌은→[부어큰]、밖은→[바큰]のように表記するはずである。

こうした違いは、どちらの表記が正しいかということではなく、発音をどのように観察しどのように表記するかという違いにすぎない。実際、語中の母音間では濃音と激音の閉鎖時間が平音より長い(拙稿 2014 など)。また、母音間での濃音と激音が、아끼다→[아끼다]～[악끼다]、기쁘다→[기쁘다]～[깁쁘다]、아프다→[아프다]～[압프다]、바탕→[바탕]～[발탕]、시키다→[시키다]～[식키다]の後者のようにも発音しうる(송철의 1993)。こうしたことから『入門』では「終声字のうち、ㅍ、ㅌ、ㄷ、ㅂ、ㅁは母音字の前で初声化した発音が追加され」(p.44) ると見て表記に反映しているものと考えられる。ただし、次のような場合は両教科書共に同じような表記となるはずである。홀어서→[홀터서](むしり取って)。これはㄹㄹを終声字の位置に並べて表記することができない(そのような文字を入力する準備がないため表記することが困難である)という文字配列上の制約、またはㄹㄹㄷの子音連続を朝鮮語話者は許容しないということなどによるものであろう。ついであるが、을어서→[을퍼서](詠じて)では[웁퍼서]と表記することは可能である。

(4) ㄴ挿入

『入門』の〈リエーゾン〉は『架け橋』の〈ㄴ(ㄹ)音の挿入〉のことである。ただし、『架け橋』精選版では〈ㄴ挿入〉という術語を用いている。『入門』も『架け橋』も〈ㄴ挿入〉の機序に関する説明は概ね同じである。『入門』は「接頭辞と語幹の間、漢字語の語幹と接頭辞の間でも生じ」(p.51) うることを説明していることが『架け橋』とは異なるが、『入門』も『架け橋』もこの現象が必須的か随意的かということまでは言明していないように筆者には思われる。〈ㄴ挿入〉に関し、両教科書を使用して筆者が気になっていることを補足する。

『入門』は〈ㄴ挿入〉の必要条件を満たすような環境では基本的に〈ㄴ挿入〉が生じ、そのように発音、表記していることが多い。〈ㄴ挿入〉の必要条件を満たす全ての場合とは言えないが、とりわけ「語尾+요」、「語+요」の環境では必ず〈ㄴ挿入〉しているものと思われる。こうした環境では原則〈終声の初声化〉で発音している朝鮮語教科書(筆者の知る限りでは서울대학교 언어교육원 (2005) がそうである。)の音声とは対照的である。また、『入門』は、국문학 연구의(国文学研究の)に対し[－/궁문향연구에](p.210)と当てるように、〈ㄴ挿入〉が起こらないこともあれば起こることもあるというような表記を採ることもある。しかし、このように現実発音として複数の発音がありうる場合に必ず併記しているということではなく、못 읽었습니다(読んでいません)に対し[몬닐것습니다](p.108)の表記を当て(教科書付属音声もそうである。)、現実発音としてありうる[머덜것습니다]～[머덜거습니다]のような〈終声の初声化〉による発音までは表記しないというように、併記しないことの方が多い。

『架け橋』は〈ㄴ挿入〉の項が初級編ではなく中級編で出てくるからか、例えば무슨요일(何曜日)の初出時(初級編 p.49)に発音に関する説明は特にない。(ただし精選版では巻末の「発音のまとめ」に〈ㄴ挿入〉の項が追加され、また무슨요일(何曜日)の発音も説明されている。)。また、練習問題の中に「집에 있을 예정이에요」(家にいる予定です)(初級編 p.110)という文があり、その音声は있을 예정→[이슬레정](いる予定)のように〈ㄴ挿入〉(と〈流音化〉)した発音が収録されているが、こうした発音について教科書本文では特に言及していない。

(5) 激音化

『入門』は「“口音+ㅎ”は“口音+対応する激音”のように発音され」(p.41) るなどのように見て、입학→[입팍](入学)、축하→[축카](祝賀)、따뜻하다→[따뜩타다](暖かい)、넣다→[넛타](入れる)、넣고→[넛코](入れて)、넣지→[넛치](入れるよ)などのような例を与えている。そして、「終声の初声化」の項で説明した通り、話し言葉での速い発音では先の発音は、입학→[입팍]→[이팍]、축하→[축카]→[추카]、따뜻하다→[따뜩타다]→[따뜨타다]、넣다→[넛타]→[너타]、넣고→[넛코]→[너코]、넣지→[넛치]→[너치]などのように発音しうると見ているものと考えられる。

これに対し、『架け橋』は「終声で[*][ʔ][p]と発音する文字の後に初声のㅎが続くとき、終声は発音されず、次の初声が激音のㅋ、ㅌ、ㅍとなる。また、終声ㅎの後に初声ㄷ、ㄸ、ㅌが続くときも、同様の現象が起こる」(初級編 p.51)と見て、先の発音であれば、

입학→[이팍]、축하→[추카]、따뜻하다→[따뜨타다]、넣다→[너타]、넣고→[너코]、넣지→[너치]などのように表記することになる。

こうした違いは先の「終声の初声化」の項での場合と同様に考えればよいものである。すなわち、発音の観察の仕方が表記にも反映されていると考えることができる。次のような場合についても先の「終声の初声化」の項での場合と同様である。끊다→[끈타] (切る)、잃다→[일타] (失う)。

(6) 有声音間のㅎ

『入門』は「ㅎ+母音」の場合だけ넣어서→[너어서] (入れて)などのように表記し、「有声音+ㅎ」の場合はこのようにㅎを落として発音を表記しない。

これに対し、『架け橋』はこうした現象をまとめて〈ㅎの無音化〉と呼び、いずれの場合も表記する。例えば、좋아하다→[조아하다] ([조아하다]のようには表記しない) (好む)、전화→[저놔] (電話)、결혼→[겨론] (結婚)、남학생→[나막쌩] (男子学生)などである。

こうした違いが生じるのは、用言語幹末ㅎでの「ㅎ+母音」と初声ㅎでの「有声音+ㅎ」ではㅎの振る舞いが異なることによる。用言語幹末ㅎでの「ㅎ+母音」のㅎは無音であるから、『架け橋』の術語を借りると〈ㅎの無音化〉が生じる。「有声音+ㅎ」での初声ㅎは有声音[h]となるが、これが弱化すると結果的に無音となり、〈終声の初声化〉が生じることもある。전화→[저놔]のように表記すると、後者の場合の発音だけを表し、前者の場合の発音を考慮していないかのような印象を読者に与えるかもしれない。

ところで、ㅎの振る舞いについて、『入門』は「終声+ㅎ」及び「ㅎ+子音」のように整理しているのに対し、『架け橋』は〈激音化〉や〈ㅎの無音化〉などの項の中で説明している。この点も両教科書で捉え方が異なると言える。ついでながら、体言の終声字に現れるㅎの発音については両教科書とも解説していないものと思われる。

(7) 口蓋音化

『入門』は先の「終声の初声化」や「激音化」の項と同様に見て、같이→[갸치] (一緒に)、발이→[발치] (畑が)、붙이다→[붙치다] (付ける)、밭이다→[밭치다] (畑だ)のように表記している。そして、「終声の初声化」や「激音化」の項と同様に考えて、話し言葉での速い発音では先の発音は、같이→[갸치]→[가치]、발이→[발치]→[바치]、붙이다→[붙치다]→[부치다]、밭이다→[밭치다]→[바치다]のように発音しうると見ているものと考えられる。

これに対し、『架け橋』は先の「終声の初声化」や「激音化」の項と同様に見て、先の発音であれば、같이→[가치]、발이→[바치]、붙이다→[부치다]、밭이다→[바치다]のように表記することになる。

こうした違いは先の「終声の初声化」や「激音化」の項での場合と同様に考えればよいものである。훔이다→[훔치다] (むしられる) などについても同様である。

(8) 鼻音化

『入門』の〈口音の鼻音化〉は『架け橋』の〈鼻音化 (1)〉のことである。また、『入門』の〈流音の鼻音化〉(ㄹのㄴ化)は『架け橋』の〈鼻音化 (2)〉のことである。

〈流音の鼻音化〉は、両教科書で捉え方が異なる。

『入門』は「流音 [ㄹ] は語中で、[ㄴ] 以外の子音 (初声) の前、および母音と [ㄹ] (終声) の後にしかあらわれ」ず「それ以外の場合には、本来のㄹはすべて対応の鼻音 [ㄴ] にかわ」(p.39) ると見て、ㄹ + ㄹ → ㄹ + ㄴ → ㄹ + ㄴ、ㄱ + ㄹ → ㄱ + ㄴ → ㅇ + ㄴなどのように定式化する。

これに対し、『架け橋』は「ある種の終声と初声「ㄹ」が連続するとき音が変化する。まず、終声ㄹの後に初声のㄹが続くとき、初声のㄹがㄴで発音される。さらに、[ㄱ] [ㄷ] と発音する終声の後に初声ㄹが続くとき、初声はそれぞれㅇㄹと発音され、初声ㄹはㄴで発音される」(初級編 p.107) と見て、ㄹ + ㄹ → ㄹ + ㄴ、ㄱ + ㄹ → ㅇ + ㄴなどのように定式化する。

実際、〈流音の鼻音化〉は適用環境が鼻音の後か流音以外の子音の後か、この現象が同化であるか否かについて、異なる見解が提出されている (이진호 2021: 151)。すなわち、『入門』は流音以外の子音の後で〈流音の鼻音化〉(ㄹのㄴ化) が起き、その結果として〈口音の鼻音化〉が起きると見ているが、『架け橋』はこの点について言明を避けているのである。

(9) 流音化

『入門』の〈ㄴの流音化〉(ㄴのㄹ化)は『架け橋』の〈側音化〉のことである。これは、子音の分類で〈流音〉という術語を使うか〈側音〉という術語を使うかの違いによるものである⁶⁾。

(10) 「ㄷ + ㅌ」の発音

『入門』は「ㄷ + ㅌ」も他の「口音 + 平音」での〈平音の濃音化〉と同様に見て、닫습니다 → [닫습니다] (閉めます)、짓습니다 → [질습니다] (作ります)、있습니다 → [인습니다] (います、あります) のように表記する。そして、「終声の初声化」などの項でも説明したように、話し言葉での速い発音では先の発音は、닫습니다 → [닫습니다] → [다습니다]、짓습니다 → [질습니다] → [지습니다]、있습니다 → [인습니다] → [이습니다] のように発音しうると見ているものと考えられる。

これに対し、『架け橋』は「ㄷ + ㅌ」に限っては「終声 [ㄷ] (ㄷ, ㅌ, ㅌなど) + 初声ㅌ → 初声ㅌと発音される」(初級編 p.36) と見て、先の発音は、닫습니다 → [다습니다]、짓습니다 → [지습니다]、있습니다 → [이습니다] のように表記している。

こうした違いはどちらが正しいかというものではなく、発音の観察の仕方の違い、説明の仕方の違いによるものであろう。すなわち、〈平音の濃音化〉について、『入門』はどのような「口音 + 平音」でも (話し言葉での速い発音でなければ) 口音の発音を残したまま平音が濃音化するのが原則であると見ているのに対し、『架け橋』は「ㄷ + ㅌ」の場合には口音が発音されないのが原則であると見ているものと考えられる。

(11) 「語幹＋語尾」の発音

『入門』は「用言語尾の頭音の発音」という項を立て、「子音語幹では語幹末がㄱである場合を除いて、用言語尾の頭音（平音）は常に濃音で発音され」（p.41）と説明している。つまり、この種の〈平音の濃音化〉を「語幹＋語尾」での発音として統一的に説明している。

これに対し、『架け橋』は「濃音化」の項の中で、「用言語幹（子音語幹）の場合」に「ㄴロ＋平音→ㄴロ＋濃音」（中級編 p.46）のように定式化している。「ㄴロ＋平音」は「口音＋平音」ではないから〈平音の濃音化〉の条件を満たさないので平音が濃音化しないのが原則であるが、「語幹＋語尾」という環境ではその境界で「ㄴロ＋平音」の場合に語尾の頭音の平音が濃音化すると説明しているわけである。つまり、〈有声音化〉及び「口音＋平音」での〈平音の濃音化〉を前提に、「語幹＋語尾」という環境で語幹末音が鼻音の場合は語尾の頭音の平音が濃音化すると説明している。

4. 文法に関する術語と概念

(12) 体言の語末音節の特徴

体言の語末音節が開音節であるか閉音節であるかということを、『入門』は〈母音語幹〉、〈子音語幹〉（それぞれ V, C と表記することもある）と呼んでいるのに対し、『架け橋』は〈母音終わり〉（終声なし）、〈子音終わり〉（終声あり）と呼んでいる。両教科書とも用言語幹に対する術語として〈母音語幹〉や〈子音語幹〉などを用いている。だから、『入門』は体言、用言ともに同じ術語を当て、『架け橋』は両方で術語をかえたものと考えられる。なお、『入門』は術語として〈助詞〉を用いているが、初版（菅野裕臣 1981）は〈助詞〉ではなく〈語尾〉という術語を当てていたこととも関係があるものと考えられる。

(13) 階称（対者待遇法）

現代朝鮮語の階称は6段階に区分される。今、最も丁寧なものを 1/6（六分の一）、最も丁寧でないものを 6/6（六分の六）とし、丁寧さの高い順から、1/6、2/6、3/6、4/6、5/6、6/6 ということにする⁷⁾。

『入門』は、1/6 を〈上称〉、2/6 を〈親しさの上称〉、3/6 を〈中称〉、4/6 を〈等称〉、5/6 を〈半言〉（반말）、6/6 を〈下称〉と称し、それぞれの階級に対応する活用形を〈上称形〉、〈親しさの上称形〉、〈中称形〉、〈等称形〉、〈半言形〉、〈下称形〉という。

これに対し、『架け橋』は 1/6 を〈합나다体〉、2/6 を〈해요体〉、5/6 を〈하체〉、〈略待〉、〈반말〉、6/6 を〈한다体〉、〈下称〉と称する。3/6、4/6 は扱っていない。

(14) 「語幹＋語尾」の構造

両教科書での用言活用形の構造の捉え方の違いを説明するために、次のような活用表中の活用形を作することを考える。

	基本形	活用形 1	活用形 2	活用形 3	活用形 4	活用形 5
母音語幹動詞	오다 (来る)	오고 (来て)	오는 (来る～)	오면 (来れば)	올 (来る～)	와서 (来て)
ㄷ語幹動詞	알다 (知る)	알고 (知って)	아는 (知る～)	알면 (知れば)	알 (知る～)	알아서 (知って)
子音語幹動詞	안다 (抱く)	안고 (抱いて)	안는 (抱く～)	안으면 (抱けば)	안을 (抱く～)	안아서 (抱いて)

『入門』は語尾の形は一つだけ、語幹の形は複数ありうる（異形態がありうる）と見ている。そして、上表の活用形 1 は「Ⅰ - 고」、活用形 2 は「Ⅰ - 는」、活用形 3 は「Ⅱ - 면」、活用形 4 は「Ⅱ - ㄷ」、活用形 5 は「Ⅲ - 서」のように提示する。活用形を「語幹 + 語尾」のように分析して考えることにすると、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは語幹で、고、는、면、ㄷ、서는語尾ということになる。Ⅰは〈第一語基〉、Ⅱは〈第二語基〉、Ⅲは〈第三語基〉と呼ばれ、上表では、

	基本形	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	または	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
母音語幹動詞	오다	오	오	와		오		와
ㄷ語幹動詞	알다	알 / 아	알 / 아	알아		알 / 아		알아
子音語幹動詞	안다	안	안으	안아		안	안으	안아

のように分析される。また、ㄷ語幹動詞のⅠ、Ⅱには알と아のように語幹末音ㄷを残した形と落とした形の二つがあり、後続する語尾の頭音により一方の形が選ばれる。ただし、ㄷ語幹動詞のⅠ、Ⅱとして語幹末音ㄷを落とした形は認めず（上表の場合はⅠ、Ⅱに알だけを選ぶ）、Ⅰ、Ⅱと特定の頭音の語尾が結びつくときに語幹末音ㄷが脱落するという捉え方をする教科書もある（内山政春 2008 など）。この点をどのように捉えようと正しい活用形はできる。『入門』は上表のようにㄷ語幹動詞のⅠ、Ⅱには語幹末音ㄷを残した形と落とした形の両方を採っているが、「ㄷ語幹の場合、ㄷが落ちる」(p.156)のように、特定の頭音の語尾と結びつくときに語幹末音ㄷが脱落するかのような表現が見られることもある。

これに対し、『架け橋』は語幹の形は一つだけ、語尾の形は複数ありうる（異形態がありうる）と見ている。上表の活用形 1 は「語幹 + 고」、活用形 2 は「語幹 + 는」、活用形 3 は「語幹 + 면 / 으면」、活用形 4 は「語幹 + ㄷ / 을」、活用形 5 は「語幹 + 아서 / 어서 / 여서」（＝連用形 + 서）のように提示する。活用形を「語幹 + 語尾」のように分析して考えることにすると、〈基本形〉から語尾다を除いた部分が語幹で、고、는、면 / 으면、ㄷ / 을、아서 / 어서 / 여서가語尾ということになる。そして、고、는などのように「形が一つだけの」（初級編 p.102）語尾を〈固定系〉、면 / 으면、ㄷ / 을などのように「母音語幹に続く形と子音語幹に続く形がある」（初級編 p.102）語尾を〈母音子音系〉、아서 / 어서 / 여서などのように「語幹末の母音が陽母音か陰母音かによって形が違う」（初級編 p.102）語尾を〈陰陽系〉と呼んでいる。また、『架け橋』では「語幹 + 아 / 어 / 여」を特に〈連用形〉と呼んでいる。

要するに、『入門』は語幹に、『架け橋』は語尾に注目して活用形の構造を説明している。『入門』で「Ⅰ＋語尾」として説明しているものは『架け橋』で語幹に〈固定系〉の語尾が結びつく場合、以下同様に、『入門』の「Ⅱ＋語尾」は『架け橋』で語幹に〈母音子音系〉の語尾が結びつく場合、『入門』の「Ⅲ＋語尾」は『架け橋』で語幹に〈陰陽系〉の語尾が結びつく場合（換言するとⅢ＝〈連用形〉となる場合）におよそ対応している。

（15）用言語幹を作る文法的接尾辞

『入門』はⅠ - ㄹ -、Ⅱ - 시 -、Ⅲ - ㅁ - の - ㄹ -、- 시 -、- ㅁ - などの用言語幹を作る文法的接尾辞を単に〈接尾辞〉と呼んでいる。また、これらの「接尾辞は、それ自身が語基活用をします」（p.129）と述べ、これらの語幹（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）を提示している。

これに対し、『架け橋』は「尊敬を表す시 / 으시、過去を表す았 / ㅁ / ㅁ、意志や推量を表すㄹ」（初級編 p.121）などの用言語幹を作る文法的接尾辞を〈補助語幹〉と呼んでいる。

ついでながら、『入門』で〈ヴォイス接尾辞〉（用言語幹に接尾して受身や使役などの意を付与する接尾辞）と呼んでいる要素を、『架け橋』では〈接辞〉と呼んでいる。これは〈ヴォイス接尾辞〉が用言語幹を作る派生接尾辞であることが〈補助語幹〉とは異なるということであろう。

（16）変格用言

『入門』の〈変格用言〉は『架け橋』の〈変則用言〉のことである。また、『入門』の〈으語幹〉は『架け橋』の〈으変則〉のことである。

〈으語幹〉と〈으変則〉という術語の違いは、母音語幹用言のうち語幹末音が一である用言の活用形（Ⅲ、〈連用形〉）の捉え方の違いによる。すなわち、語幹末音が一である用言の活用を、『入門』は〈正格〉である（母音語幹用言の活用の「規則」の一種である）と捉えているのに対し、『架け橋』は〈変則〉である（母音語幹用言の活用の「規則」とは異なる）と捉えていることになるはずである。

（17）未実現連体形

『入門』の〈未実現連体形〉は『架け橋』の〈未来連体形〉のことである。

『入門』は「用言の連体形は、Ⅰ - ㄴ (34 課③)、Ⅱ - ㄴ (33 課②、35 課③)、Ⅰ - ㄴ (39 課④)（以上実現）とⅡ - ㅁ (未実現) (36 課③) の4つがあ」（p.175）と捉えている。つまり、〈実現連体形〉と〈未実現連体形〉という対立を成すと捉え、〈実現連体形〉と〈未実現連体形〉のそれぞれで〈過去〉と〈非過去〉のような対立を成すと捉えているものと考えられる。つまり、〈実現〉と〈未実現〉及び〈過去〉と〈非過去〉という二次元的対立から説明していると考えられる。

これに対し、『架け橋』は動詞の連体形は〈現在連体形〉、〈過去連体形〉、〈回想連体形〉、〈未来連体形〉のような対立を成す、形容詞・指定詞の連体形は〈現在連体形〉、〈過去連体形〉、〈未来連体形〉のような対立を成すと捉えているものと考えられる。つまり、『入門』のような二次元的対立ではなく、これらを同じ次元で説明していると考えられる。

ところで、〈未実現連体形〉後の平音が濃音化しうることについて、この連体形を解

説している項で、『入門』は「Ⅱ - ㄹのあとにくる平音は必ず濃音にな」(p.132) ると説明しているのに対し、『架け橋』は特に説明を与えず、この連体形を含む表現やこの連体形に由来する語尾などを示す際に発音について説明している。

(18) 名数詞

『入門』の〈名数詞〉は『架け橋』の〈助数詞〉のことである。

(19) 分析的な形

『入門』の〈分析的な形〉は、『架け橋』では単に「表現」と言っているものが多いものと思われる。また、『入門』の各課の文法解説に見られる「さまざまな文法的形式」の項の〈文法的形式〉については、『架け橋』では助詞、語尾、表現などと言っている場合が多いものと思われる。

(20) 用言複合体

『入門』の〈用言複合体〉(하 - 省略形) は、『架け橋』の引用形を含む表現などの縮約形におよそ対応する。これは両教科書で捉え方が異なっている。

『入門』は「ある種の用言終止形あるいは接続形 + 하다 という形で、하 - が消えて複合的な形ができるもの」(p.213) を〈用言複合体〉と呼んでいる。また、「“下称終止形 + -고, -는” の -고, -는は、하고, 하는の하 - が省略されたもの」(p.213) と見ている。

これに対し、『架け橋』は『入門』の〈用言複合体〉のような形は「語尾고と動詞語幹하が省略された表現」(p.43) と見ている。

例えば、간담니다 (行くそうです、行くんです) については、『入門』は간다 합니다 から하が省略されたと見ているのに対し、『架け橋』は간다고 합니다から고 하の部分が省略されたと見ているものと考えられる。また、가렵니다 (行こうと思います) については、『入門』は가려 합니다から하が省略されたと見ているのに対し、『架け橋』は가려고 합니다から고 하の部分が省略されたと見ているものと考えられる。このとき、『入門』では간다고, 가려고をそれぞれ、간다 하고, 가려 하고の〈用言複合体〉と見ているものと考えられる。

5. その他

(21) 言語名

『入門』は〈朝鮮語〉を、『架け橋』は〈韓国朝鮮語〉を言語名として基本的に用いている。『入門』の著者である菅野裕臣先生の東京外国語大学所属時に、『架け橋』の筆頭著者である生越直樹先生の東京大学所属時に、各教科書が執筆されているので、それぞれの大学がその時に採用していた言語名を採ったものと推察される。また、対応する朝鮮語訳は原則として共に〈한국어〉であるが、『架け橋』では〈한국어 / 조선어〉(中級編 p.17) も見られる。

注

- 1) 初版『朝鮮語の入門』（菅野裕臣 1981）と改訂版とは、大韓民国の正書法の改訂に伴い表記を改める、初版の〈語尾〉（体言語尾）、〈陳述形〉などが改訂版ではそれぞれ〈助詞〉、〈叙述形〉などに改められているなど、術語と概念に関して初版から変更になったところがある。本教材研究では2年実習で用いている改訂版に従って分析する。
- 2) 最近、初級編の改訂版にあたる『ことばの架け橋 精選版』（生越直樹他 2020）（以下、精選版と略記する。）が出版された。この精選版は、初級編では用いていなかった〈濃音化〉という術語が明示されるようになる、初級編では用いていた語尾の種類に関する〈固定系〉、〈母音子音系〉、〈陰陽系〉という概念が用いられなくなるなど、術語と概念に関して変更になったところがある。本教材研究では1年実習で用いている初級編に従って分析する。
- 3) 2年実習「朝鮮語 11」で『入門』を、1年実習「朝鮮語 3」で『架け橋』（初級編、中級編）を使用している。「朝鮮語 11」は『入門』の他、音声や読本などの補充教材を併用している。「朝鮮語 3」は「朝鮮語 1」、「朝鮮語 2」と連携し教科書に従って進めている。すなわち、朝鮮語 1～3は授業担当者がそれぞれ異なるが、毎回の進度を教員間で報告し合い教科書に従って前回の授業の続きから次の授業を進めている。なお、筆者はマルチリンガル教育センターの「朝鮮語中級」でも『入門』を教科書としている。「朝鮮語中級」履修学生はその前に豊中の植田晃次先生ご担当の「朝鮮語初級」で『架け橋』精選版を教科書として学んでいる。そのため、筆者が担当している「朝鮮語 11」も「朝鮮語中級」も1年生のときに『架け橋』で学んだ学生を主な対象として『入門』を教科書に授業していることになる。なお、本稿の分析の中には授業での受講生とのやり取りを通じて気づかされた点が少なくないことを明らかにしておく。
- 4) 本稿で記述したもの以外に説明すべきものもあろう。尤も、筆者の誤解を含め、各教科書の執筆者らとは異なった解釈を筆者がしている可能性も大いにある。自身の浅学菲才を恥じるばかりである。なお、本稿は教科書間の捉え方の違いに着目した愚考であるが、朝鮮語教科書の記述それ自身の諸問題を論難、喝破している最近の論考には辻野裕紀（2020）などがある。辻野裕紀（2020）を読むに、身につまされる思いがするのは、筆者だけであろうか。また、先行研究を具体的に挙げることはできないが、本稿で取り挙げている事柄の中にはそれだけで一つの論考となるようなものも含まれている。そのようなテーマを、本稿を読んだ学生がレポートや卒業論文のテーマとしてくれたらというのが、筆者が教材研究として本稿を執筆する一つの理由でもある。
- 5) 最近の教科書には両者に別の術語を当てるものも見られる。五十嵐孔一（2020）は『架け橋』と同じく〈連音化〉という術語を用いているが、特に両者を区別するために、前者に〈終声字の初声音化〉、後者に〈終声音の初声音化〉という術語も当てている。
- 6) 〈舌側音〉、〈舌側音化〉と言う術語を用いる教科書もある（塚本秀樹他 1996 など）。
- 7) n/6（六分のエヌ）のような呼称は、植田晃次編（2004）を参考にした。

参考文献

五十嵐孔一

- 2020 『改訂版 一冊目の韓国語』 東洋書店新社、東京.

岩井亮雄

- 2014 「韓国語の語中母音間での平音・濃音・激音の発音に関する音響音声学的研究」
『東京大学言語学論集』 35: 105–124. 東京大学文学部言語学研究室、東京.

植田晃次編

- 2004 『朝鮮語副教材 (1)』 「日本における高等学校外国語教育用の朝鮮語教科書の開発と研究」資料 2. 大阪大学言語文化部朝鮮語教育講座、豊中.

内山政春

- 2008 『しくみで学ぶ初級朝鮮語』 白水社、東京.

生越直樹

- 2009 『ことばの架け橋 中級表現編』 白帝社、東京.

生越直樹・曹喜澈

- 2011 『ことばの架け橋 改訂版』 白帝社、東京.

生越直樹・三ツ井崇・チョ・ヒチョル

- 2020 『ことばの架け橋 精選版』 白帝社、東京.

菅野裕臣

- 1981 『朝鮮語の入門』 白水社、東京.

- 2007 『朝鮮語の入門 改訂版』 浜之上幸・権容璟改訂、白水社、東京.

塚本秀樹・岸田文隆・藤井幸之助・植田晃次

- 1996 『グローバル朝鮮語』 くろしお出版、東京.

辻野裕紀

- 2020 「韓国語教科書の難点を剔抉する — 「文字と発音」を中心に —」 『言語科学』
55: 1–18. 九州大学大学院言語文化研究院、福岡.

서울대학교 언어교육원

- 2005 『한국어 3』 2 판. 문진미디어, 서울.

송철의

- 1993 「한국어의 자음」 『새국어생활』 3 (1) : 3–22. 국립국어연구원, 서울.

이진호

- 2021 『개정 증보판 국어 음운론 강의』 집문당, 서울.